

障害児・者問題というフィルターを通して見ると

ご自身の骨折で入院していたメル友から退院した旨のメールに、地域の中学校に通う重度の障害があり医療的ケアも必要なお子さんの送迎に触れた次のような部分（抜粋）があった。

「まずは、教員が自宅に訪問して下さいます。

その後は、しばらくは支援サービスやわたしの友人の力を借り通学します。」

退院後しばらくは母親の送迎は無理なだけに、しばらくは訪問教育で対応してくれることはまずは一安心。

以前に他の医療的ケアが必要な子どもの母親たちから聞いた話だが、支援学校であっても、医療的ケアが必要な子どもの通学は、スクールバス内では対応できなからと家族の送迎が就学の条件、また母親の付き添いがないと郊外学習、就学旅行も不可能と云われることがあるよう。

障害児の支援は取りも直さず家族（主に母親）支援であり、教育活動は子どもが存在するところにあり、特に医療的ケアを必要とするお子さんには体調によっては訪問教育と通学をもっと柔軟に対応・運用していいのではないかと日頃から思っている自分なので、今回の地域の中学校の対応は英断だと思う。

しかし、やはりその後は母親が送迎出来るまでは友人の力も借りなければならないことは、支援策がまだまだ不十分なことの象徴と云えるだろう。

何も障害児や親のことだけでなく、新型インフルエンザの流行の時は保育所や小学校低学年の子どもの働く母親は、勤めを休まざるを得ないで状況のことは報道等でご存じの通りである。

昨日の総選挙では、各政党とも子育て支援をマニフェストに掲げていたが、子育て支援金給付も必要かなと思うが、それより親が子どもを育てるソフト面の支援策、つまり親子の生活実情に密着する柔軟な対応施策をどう考えているのかと思うと、選挙用マニフェストに過ぎないと思ってしまう。

つまり、障害ある、なしに拘わらず、親子の支援策は本質的に同じであり、障害児・者問題というフィルターを通して見ると社会の未熟な側面がより鮮明に見えてくる。

逆説的云えば、障害児・者の問題は今の社会の成熟度を示す「ショーウィンド」とも云える。

自分が医療的ケアを必要とする子どもの問題に拘るのは、障害児支援策の中でもこうした親子が抱える問題はつい疎かにされがちであり、社会の豊かさを考えて行く根源的な問題が凝縮していると思うからでもある。